ブラジルの歯科（その２）

星 淳子
（H&A コンサルティング代表）

ブラジルの歯科大

日本の歯科大学は一律６年制だが、ブラジルでは４年または５年と大学により在学期間は若干異なるが、総じて日本よりも短い。しかし学ぶ内容は日本もブラジルも同じレベルであるため、相当な詰め込み方式と言える。その結果、卒業に要する平均年数は５年となっており、４年間で卒業することはかなり難しい。

国家試験はなく、大学卒業と同時に歯科医師免許を取得することになる。ブラジルの歯科医数はアメリカに続く世界第２位と多く、その水準は一般的に高いと評価されている（注1）。また多くの歯科医院は大都市が集まるブラジルの南東部に所在している。

卒業後に晴れて歯科医として活躍するわけだが、医師免許の取得前から、大学に設置されているクリニックで、大学の監督の下、学生が治療を必要とする国民に、無料また低金額で治療を行うこともある。貧困層にも平等に医療を提供したいとの思いによるものだが、患者の中には楽ではない暮らしの中にあっても、手作りのお菓子やプレゼントを持参する者もいる（これは、医者と患者の信頼関係の証でもある）。このように示される感謝の気持ちが嬉しく、歯科医師を目指す気持ちが高ぶったことや、患者の愛らしい笑顔を今でも鮮明に覚えている。大学のクリニック以外でも、サンパウロ市内にある大学ボランティアグループ ABEUNI（https://www.abeuni.org.br/abeuni/）に所属し、貧しい人々に治療を施す活動にも従事した。週末に地方へ行き、現地の貧しい人々に簡単な治療やセミナーを行うもので、皆が笑顔で迎えてくれた。充実した活動の中、多くの経験を積むことが出来たが、貧困というブラジルが抱える現実を肌で感じる貴重な経験にもなった。

広大なブラジルでは、未だに読み書きが出来ない人が多く、大学卒の割合は 18%にも満たない（IBGE2019年）。日本の大卒の割合が 20代、30 代世代で 50% を越すという中で、この数字を見ると、その少なさに驚愕する。

▲読み書きができない人の割合（15 歳以上）

この識字率の低さや教育の不徹底が、ブラジルの格差問題、貧困問題に横たわる根源的な原因との認識も、現場で治療を続ける中で持つようになった。

ちなみに、ブラジルの歯科大学を卒業後、日本の歯科大学に留学した訳だが、ブラジル国内で、現場経験を積んでいたため、日本でも患者への接し方に不自由は感じなかった。ただし、当時はまだ漢字の読み書きが十分に出来なかったため、カルテの記述には相当苦労した記憶がある。そんな時も、患者の笑顔が、何よりの支えであった。

美容も歯科クリニックで

ブラジルへ行くと、年齢に関係なく歯科矯正をしている人を多く見かける（今では様々な矯正方法あり、見た目も様々）。人によっては、幼い頃に歯の矯正をしたにもかかわらず、さらに美しい歯並びを目指し、大人になってから再度矯正するような人もいる（実は私もそのひとり）。また日本ではさほど見かけない、いや見たことがない中高年の歯矯正も珍しくない。ブラジル国内でも歯の矯正は安くはないが、高額でも矯正する人は依然として多い。矯正は高額であるが故に、矯正していることが、一種の社会的ステータスを表すものだとの認識も存在する。インターネットの普及によりブラケット（矯正器具の一種）の購入が容易になったが、自分で購入し矯正を試みる、もしくは器具を装着することで、社会的ステータスを演じる、といった人もいるようだ。 このように口元をいかに良く見せるか、というあくなき欲求は続く訳だが、ブラジルで歯科医が対応する美は、歯に限ったことではない。ボトックスやヒアルロン酸の注射を施す歯科医も珍しくない。特にほうれい線は口元だから、歯科医の得意分野かもしれない。

痛みに弱い国民

ブラジル人は痛みに弱い。日本人も歯科治療における痛みに恐怖を覚える人は少なくないが、ブラジル人の恐怖心は日本人の比ではない。日本人は、我慢強く困難にも耐え抜く気質との印象があり、時にそれが美しいとも思えるが、ブラジル人は、耐えることを美としない。余りの恐怖のため、麻酔は当然として、経口鎮静薬（口から眠らせる薬を服用）を選択する患者も多くいる。また痛みに対する恐怖は、今後の治療継続にも大きく影響することから、歯科医は恐怖心を根付かせないように、麻酔の効果に細心の注意を払う。ちなみに、胃カメラや大腸検査を、鎮静薬を使わず受検する日本人が多いと話すと「信じられない」「nem morta（死んでも嫌だ）」と、答えるブラジル人は少なくない。

（注１）https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/iryou/downloadfiles/pdf/ countryreport_Brazil.pdf

オリンピックのボランティアしてきました！

池 聡子
（ポルトガル語通訳案内士）

コロナが収束しない中での東京オリンピック。ポルトガル語サポートとしてボランティアに登録したが、本当に実現するのかずっと半信半疑だった。でも、ユニフォーム受領、研修、ワクチン接種と進み、モチベーションが上がってきた。開会式をTV で楽しみ、さあ活動開始！

言語サポートは本来なら外国人観光客への案内通訳等も含まれたが、無観客になってしまい、試合直後のマスコミの簡単なインタビューの通訳等が主な仕事となった。海外ボランティアも来日不可となり、メンバーは留学生等の在日外国人や日本人で構成されていた。

私の所属はハンドボールの代々木国立競技場。男女それぞれ12 枠が２グループに分かれ、総当たり戦の予選後、８強による決勝戦でのトーナメント方式でメダルが決まる。今回、日本は男女とも開催国枠での参加。約 2/3 は欧州の国で実際強い。その中でブラジルは男女チームとも出場し頑張っていた。

残念ながら予選最後の試合で男子はドイツに、女子はフランスに負け、予選敗退。女子の方はフランスも負ければ決勝進出が危うかったので、両チームとも必死だった。（その後、フランスは男女とも金メダルを取る。）

ブラジルチームの姐御肌のゴールキーパーが、試合終了後涙した姿は今でも忘れられない。

他に男子はポルトガル、女子はアンゴラチームが参加していたが、全部予選敗退してしまい、これで私の役目も終了と思っていたら、その後、サッカーのブラジル対メキシコ準決勝戦とボクシングのメダルセレモニーで声がかかった。

サッカーのブラジル代表選手を間近で見られたことも光栄だったが、ボクシング・ミドル級のエベルト・ソウザ選手の決勝戦の印象が深い。最終ラウンドまで判定負けしていたが、残り僅かでそれを KO で逆転。相手は優勝候補筆頭だっただけに、決着が付いた時の同選手の喜びはどんなに大きかったことか。しかし、リングを降りたソウザ選手は意外と優しく明るい青年。メダルセレモニーの前に、まだ頭を切り替えられない銀メダル選手の重い雰囲気を明るくしようと、英語で銀・銅の選手らに積極的に話しかけ、場を和ませていた。

今回の体験は予想以上に貴重で、学ぶことも多かった。メンバーの中には、もう３年後のパリ五輪を目指している人もいる。今回、国内外の選手達から沢山の賛辞をもらった日本のボランティアがパリ五輪に「おもてなしの精神」を届けてくれることを期待している。

ジャーナリストの旅路

犯罪は国を映す？

中川千歳
（共同通信サンパウロ支局長）

夕刻のパウリスタ大通りを歩いていたら、耳をつんざくような女性の叫び声が聞こえた。目を向けると、反対側の歩道で女性が半狂乱になって何者かを追いかけている。フードデリバリーのボックスを背負い自転車に乗った男のようだ。「私の携帯電話」と叫んでいるのでスマートフォンをひったくられたのだろう。

必死の女性は車道に飛び出しひかれそうになりながらも走る。だがついにあきらめたのか、泣きじゃくりながら交番に向かった。

メディアでよく報じられている携帯電話のひったくりだ。被害者の悲嘆ぶりに、こちらもすっかり落ち込んでしまった。ショックだったのは逃げる男の周りに多くの人がいたのに、誰も何もしなかったことだ。日本だったら義侠心にかられて行動を起こす人がいるのではないかと思ったが、それはあまりにも危険なのだろう。

昨年８月終わりにブラジル・サンパウロに赴任した。着任早々、猛スピードで逃げる自転車の男と銃を構えて追いかける警官を間近に見て「ここはブラジルだ」との思いを強くし、日本で〝平和ぼけ〟していた頭を切り替えねば、と戒めた。

ショックが大きかった冒頭の事件から数カ月後、またしてもほぼ同じ場所で携帯電話ひったくりを目撃した。今度の被害者は男性。道の反対側に警官もいたが、一瞬追いかけるそぶりを見せてすぐにあきらめていた。

恐ろしいのは前回ほどショックを受けず「またか」と感じていた自分の心の変化だ。格差が大きく犯罪が頻発するブラジルでは自分も〝犯罪慣れ〟してしまうのか。被害者になるのはごめん被りたいが。

これまでに海外はアメリカ・ロサンゼルスとイランに勤務した。どちらも治安はそれほど悪くなかったと思うが、ロスでは銃社会を反映してか、住んでいた集合住宅でも２度の銃撃事件があった。２度とも海外出張中で難を逃れた。

イランで身近な犯罪は痴漢だった。厳格なイスラム教の戒律が適用され、女性は異教徒の外国人でもスカーフで髪を隠すのが義務。肌や体の線を出す服装はご法度だった。自由恋愛が表向きは禁止され、未婚の男女が公共の場で一緒にいると風紀警察の取り締まり対象になりかねなかった。

そんな環境だから欲求不満の男性が多かったのか。何度か被害に遭ったし、周りにも被害者は多かった。犯罪は社会の映し鏡だ。実情を知り、自衛を怠らないようにしたい。